ことばの社会心理学

［第3版］

岡本真一郎【著】
OKAMOTO Shinichiro

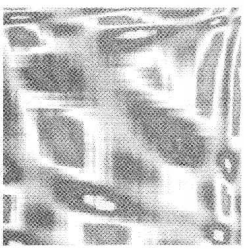
ナカニシヤ出版

ことばの社会心理学

［第3版］

岡本真一郎［著］

江苏工业学院图书馆
藏书章



ナカニシヤ出版

京都大学図書
人環・総人図書館

筆者略歴

おかもとしんいちろう
岡本真一郎

1952年生まれ。1982年京都大学大学院文学研究科博士課程（心理学専攻）満期退学。1983年より愛知学院大学文学部心理学科講師，助教授，教授を経て現在心身科学部心理学科教授。博士（文学）。

主な著者，論文：

言語的表現の状況的使い分けに関する社会心理学的研究　風間書房　2000年

Determinants of gratitude expressions in England. *Journal of Language and Social Psychology,* **16**. 1997年（W.P. Robinsonと共著）

アイロニーの実験的研究の展望－理論修正の試みを含めて－　心理学評論，**47**. 2004年

Perception of *hiniku* and *oseji:* How hyperbole and orthographically deviant styles influence irony-related perceptions in the Japanese language. *Discourse Processes,* **41**. 2006年

ことばの社会心理学［第3版］

2000年4月20日　初　版第1刷発行
2001年10月20日　第2版第1刷発行
2006年5月20日　第3版第1刷発行

定価はカバーに
表示してあります

著　者　岡本真一郎
発行者　中西　健夫
発行所　株式会社ナカニシヤ出版
〒606-8161 京都市左京区一乗寺木ノ本町15番地
telephone　075-723-0111
facsimile　075-723-0095
郵便振替　01030-0-13128
URL　http://www.nakanishiya.co.jp/
E-mail　iihon-ippai@nakanishiya.co.jp

印刷・創栄図書印刷／製本・兼文堂／装幀・白沢　正

Printed in Japan

Copyright © 2000, 2001, 2006 by S. Okamoto

ISBN4-88848-982-3　C3011

はじめに

ことばは，人間のコミュニケーションにとってなくてはならないものである。我々は日常生活のさまざまな場面で，さまざまな形でことばを用いている。しかし，その本質はどんなものかを解明していくことは容易ではない。ことばとは何であるのかを知ろうとして，古くから多くの人々がいろいろな方向からアプローチを試みてきた。

まず，ことばそのものの構造や機能の解明が試みられてきた。言語学の主要な部門として，統語論（syntax），形態論（morphology），意味論（semantics），音声学（phonetics）・音韻論（phonology）がある。統語論では文の構造に関して，形態論では語形成や語形の変化に関して検討されてきた。意味論では語や文の意味についての研究が行われてきた。また，音声学・音韻論では言語に用いられている音に関してその特性や，諸言語における体系，構造が考察されてきた。

ところで，20世紀の後半の言語の研究に革命をもたらした人物として，Chomsky（e.g., 1957, 1965, 1986, 1995）の存在はよく知られている。Chomskyは，人間のことばは脳の構造に基づいた生得的な能力に根ざすもので，子供は母語にさらされることで，教え込まれなくてもことばを習得していくと主張した。また，ことばがヒトという種の生物学的特性に基づくというのであれば，世界の諸言語の基本的な文法構造には普遍性が仮定される。Chomskyの生成文法（generative grammar）の理論は，個別言語を越えた包括的な体系を目指して何度も改訂され（稲田，1998），それに対する批判も含め（e.g., 小林，佐々木，1997；野村，2003），さまざまな立場から議論が繰り広げられてきた。

ただ，Chomskyが考察の対象としているのは，ある言語を完全に操ることのできる理想的な話し手の言語能力（competence）である。ことばの言い間違いとか，対人関係を配慮しての言い淀みとかは対象とされない。実際に人々が言語を用いてコミュニケーションを行っていく際の諸側面（言語運用：performance）に関わるものではないのである。そして，話し手が自分の置かれた状況の諸要素，対人関係や先行経験などをどう組み込んで実際に発話を行うのか，それが聞き手にどのような印象で受け取られるのかといった，ことばが諸状況でどのように用いられていくかに関する問題も，Chomskyの理論の範囲ではない。しかし，ことばについて考察していく上では，これらは無視できない問題である。

そういった点に対処しようとするのが，語用論（pragmatics）や社会言語学（sociolinguistics）である。語用論は言語に関わる諸現象を，統語論や意味論といったことばそのものの体系の中だけで解明するのではなく，話し手，聞き手が置かれた状況の中でどのように使用され理解されるか，という観点から解明することを目指している（e. g. 小泉，2001；Levinson, 1983；Thomas, 1995）。また社会言語学は，ことばの地域的，社会的バリエーションや，ことばと文化，ことばと社会制度の問題など，社会の文脈の中でことばの性質を明らかにしようとするものである（e. g., 東，1997；田中・田中，1996；Wardhaugh, 2002）。ただ，領域の捉え方は研究者によって一様ではない。たとえば語用論と統語論や意味論の関係や，語用論と社会言語学それぞれがカバーする範囲についても，さまざまな考え方がある（亀井・河野・千野，1996；Levinson, 1983）。

さてChomskyの主張は，一方では言語学と心理学との密接な関わりを再認識させ，その後の認知科学の発展にも大きな影響をもたらすものであった。とくに心理言語学（psycholinguistics）においては，1960年代から1970年代にかけてChomskyの生成文法の影響を強く受けた，言語理論と言語発達や言語処理のメカニズムを直接結びつけようとした研究が盛んに行われた。1980年代以降は生成文法と直結した研究は減少したものの，人間の言語発達，言語理解や発話，言語記憶等のメカニズムについて，ことばの体系との関連を視野に入れた研究が数多く行われてきている（e. g. Carroll, 1999；川崎，2005）。

本書ではこうした語用論，社会言語学や心理言語学の研究成果を念頭に置いた上で，ことばに対して社会心理学的な立場からアプローチする。具体的にはことばが対人過程の中でどのように発話され理解されるか，また，ことばの形式的バリエーションが対人関係とどのように関わり合うかについて，一部私見も交えてさまざまな研究を紹介していく。とくに実験社会心理学の特徴を生かした，要因を統制し，また統計的技法を用いた実験，調査からの知見を重点的に扱っていく。

本書の各章の内容を簡単に述べる。第1章では発話からの推論と言語行為に関する語用論の知見を，Clark（1996），Grice（1975），Searle（1969，1975），SperberとWilson（1986／1995）の議論を中心にして論ずる。これらは以下の各章で取り上げる実証的研究の拠り所となるものである。

第2章では，会話はどんな特徴を有するかについて述べる。そこでは会話分析と指示的コミュニケーションの実験的研究という，2つの異なったアプローチを紹介する。

第3章から第7章は，言語表現の状況的使い分けに関するものである。第3章は対人関係と言語表現の問題のうち，使い分けの規範が比較的明瞭な敬語および呼称

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

について，規範や実態を述べる。第4章はBrownとLevinson（1978／1987）のポライトネス理論を中心に据える。理論の紹介に次いで，要求を始めとした種々の言語表現の状況的使い分けに関して実証的研究を紹介し，BrownとLevinsonの理論の問題点を指摘する。そして，今後理論を修正していくために重要と考える点を論じる。第5章ではポライトネス理論の枠組からは離れて，行動展開表現，感謝とねぎらいの表現，対人非配慮の表現などのトピックを扱う。さらに第6章では，アイロニーについて詳しく述べ，世辞や嘘など関連する言語行動にも触れる。

第7章と第8章は，地域や社会などによることばのバリエーションに関連する諸問題を扱う。第7章では個別の言語，地域方言，社会方言について概説し，またことばの性差や若者のことばについても触れる。第8章では，第7章の議論もふまえ，言語や方言の違いが対人的過程にどのように関わるかを扱う。まず，言語や方言が話し手の印象に及ぼす影響について述べ，次いで対話をする2人のスタイルの相互の影響を扱った話体調節理論を紹介する。

第9章ではことばと社会的認知の関わりを扱った社会心理学的研究として，3つの問題を取り上げる。まず，ことばと社会的事象に関する推論との関わりについての研究を紹介する。次いで，言語スタイルの説得効果について述べる。最後に，述語のタイプと社会的認知の関連を扱った研究として，最近社会心理学で注目を浴びている，言語的カテゴリーモデルについて論ずる。

ことばに関わる諸現象には，言語間，文化間で異なりがあることが当然予想される。本書では，できるだけ日本語を対象とした研究データを多く引用するように心がけたつもりである。幸いにも日本では敬語の理論的，実証的研究や，方言の使用に関する社会言語学的研究等が多く行われている。諸領域の研究のうち，社会心理学的観点から興味深いと思われるものを，筆者が気のついた範囲で引用することにした。

本書ではさまざまな分野の研究を扱っている。そこで研究の手法にも実験や調査によるもののほか，会話分析，シナリオ等の用例の分析や，研究者の作成した文例を研究者の言語的直観に基づいて分析するなど，多様なものがある。各手法にはそれぞれ長所と短所がある。たとえば直観的な手法は議論に応じて多様な例を扱えるが，判断が微妙になってくると，判断者の思いこみが影響したり，判断者による個人差が生ずることがある。ロールプレイなどの実験的手法は，発話を規定する状況要因を統制できる反面，内容によっては話し手の実際の発話をそのまま反映できるとは限らない。会話分析は生の発話を扱えるが，状況要因を扱うのには不向きな場合もある。しかし，今回はできるだけ長所のほうに目を向けて，多様な方法による研究を引用することにした。

なお，本書ではテーマの扱い方の深浅に差がある。とくに会話分析（第2章Ⅰ），敬語（第4章Ⅱ），ことばのバリエーション（第7章）については，こうした問題になじみのないかたがたへのイントロダクションとして，ごく簡単に概略を述べたに過ぎない。一方，第4章，第5章，第6章は他章に比べ記述が詳しく，筆者の私見が多くを占めている。この点あらかじめご了承を願いたい。

また，本書は一応第1章から読み進む構成にはなっているが，ある章を独立して読んでも十分理解していただけると考える。その一助となるよう，本書の中で関連する章，節，ページなどを（ ）内に示して，相互参照を可能にしておいた。なお，原著のページは，これと区別できるように〈 〉内に表記した。

表記法等に関して

英語の専門語の日本語訳は，その日本語訳書が出版されている場合は，原則としてそこでの訳語に従ったが，全体の統一を図るために一部変更したものもある。

本書では文や発話の作例を示す。その場合の共通の表記法は以下の通りである。

1. ［　］の中は状況や話し手，聞き手に関する説明である。

［父が子に］太郎，こちらへおいで。

2.「＊」はある状況でその発話を用いることが直観的に判断して不自然，不適切な場合を，「?」はやや不自然，不適切な場合を指す。もちろんこうした判断には個人差がある。本書では他の研究者の判断も参考にしたが，最終的には筆者自身の判断に拠っている。

？体に気をつけてもらえないかなあ。

＊君は頭が痛い。

3. {a／b／c} は簡略表記で，いずれかが任意に選ばれることを示す。

さあ，どんどん食べて {φ。／てくれ。／?てくれない？}

は，

さあ，どんどん食べて。

さあ，どんどん食べてくれ。

？さあ，どんどん食べてくれない？

を簡略表記したものである。

4. （　）内は省略される場合があることを示す。

横山（君），こちらへおいで。

は，

横山，こちらへおいで。

横山君，こちらへおいで。

を簡略表記したものである。

また，本書では自然に行なわれた会話の例も諸文献から引用した。その際の記法はできるだけ統一したが，細部が不明な場合は原著の表記に従った。表記法に関する注は，引用した会話を掲載した表に示した。

目　次

はじめに　i

第1章　ことばが伝えること――1

Ⅰ．共通の基盤 ……1
Ⅱ．会話の協調の原則 ……4
Ⅲ．ことばと行為 ……9
　1．Austin の理論　9
　2．Searle の理論　10
Ⅳ．関連性理論 ……15

第2章　会話の展開――23

Ⅰ．会話の基本構造 ……23
Ⅱ．指示的コミュニケーション ……30
　1．相手に向けられたメッセージ　31
　2．相互作用とメッセージ　34
　3．問題点　40

第3章　対人関係と言語表現――45

Ⅰ．さまざまな状況要因 ……46
Ⅱ．敬語 ……48
　1．敬語の体系　49
　2．敬語の使い分けの規定因　52
　3．敬語使用の実態　53
Ⅲ．ひとの呼び方 ……57

1．呼称の体系 57
2．対称詞の使い分けの実態 60
3．ヨーロッパ諸語の二人称 64

第4章 ポライトネス 67

Ⅰ．ポライトネスの理論 67
1．Brown と Levinson の理論 67
2．Lakoff の理論と Leech の理論 71
Ⅱ．要求表現 72
1．3タイプの要求表現 73
2．日本語の要求分類 74
3．定型的表現の使い分け 78
4．ヒントと要求談話の展開 84
Ⅲ．種々の言語行動 87
Ⅳ．Brown と Levinson の理論の問題点 91
Ⅴ．理論修正の試み 96

第5章 対人配慮の諸相 101

Ⅰ．行動展開表現の体系 101
Ⅱ．感謝とねぎらいの表現 108
Ⅲ．フェイスを損なう言語行動 112
Ⅳ．ポライトネスの文化差 113
Ⅴ．ポライトネスと自己 116

第6章 アイロニーとその周辺 119

Ⅰ．アイロニーの知覚 119
1．アイロニーと伝統的見解 119

2．新しい理論　121
3．アイロニーの知覚の枠組　128
Ⅱ．アイロニーの周辺：社会的機能と関連づけて ……133
1．アイロニーの社会的機能　133
2．アイロニー，賞賛，世辞　135
3．親密感を伝えるからかい　141
Ⅲ．欺瞞のコミュニケーション ……143

第7章　ことばのバリエーション――147

Ⅰ．言語 ……147
Ⅱ．方言 ……149
1．地域方言　149
2．社会方言　152
3．関連する諸問題　155
Ⅲ．ことばの性差 ……158
Ⅳ．若者のことば ……163

第8章　バリエーションの評価――167

Ⅰ．ことばの効用とアイデンティティ ……167
Ⅱ．言語，方言と話し手の評価 ……169
Ⅲ．方言イメージの研究 ……175
Ⅳ．話体調節理論 ……182
1．収束　183
2．分離　186
3．収束と分離をめぐる諸問題　189

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第9章　ことばと社会的認知――――――――――――――― 191

Ⅰ．言語表現からの誘導 …… 191

1．誘導される印象　191

2．実験や調査における「推意」　193

Ⅱ．言語スタイルと説得 …… 195

1．話し手の印象と説得　196

2．広告表現の誤誘導効果　200

Ⅲ．言語的カテゴリーモデル …… 203

1．動詞と社会的認知　203

2．対人動詞　204

3．集団間関係との関わり　206

4．コミュニケーションとの関わり　208

注　211

引用文献　215

おわりに　255

ことばが伝えること　1

ひとが発したことば（発話：utterance）からは，いろいろなことが伝わる。それは単に，明示的に言明された事柄だけではない。本章では，ことばによるコミュニケーションの中で話し手の意図がどのように伝えられるか，また，その際どんな推論がなされるかに関して理論的研究を紹介する。まず，Clark（1996）に従って共通の基盤の問題を論じ，次いで発話からの推論に関して先駆的な役割を果たしたGrice（1975）の考え方と，それを修正発展させたLevinson（2000）の議論を述べる。そしてSearle（1969）を中心にことばと行為の問題を述べた後，SperberとWilson（1986）の関連性理論も紹介する。こうした議論は，第2章以下で紹介する実験的研究を考えていくためのベースとなるものである。

なお発話からは，話し手の感情や評価，とくに対人関係に関わるさまざまな感情や評価が伝わることも重要である。そうした点は第3章以降で扱う。

本書では，話しことばによるコミュニケーションを中心に考える。しかしその中には，手紙，E-mailなど，文書によるコミュニケーションにも適用可能な議論も多い。「話し手―聞き手」と記した場合でも，適宜「書き手―読み手」（または，話しことば，書きことばをまとめて「送り手―受け手」）と読み替えていただければと思う。

1．共通の基盤

本節では，話し手と聞き手がコミュニケーションにおいて利用する共通の知識に関して，Clark（1996ほか）の議論を中心に述べる。

電車の中であなたの知らない男性どうしが話している。聞こうとしないでも会話が耳に入って来る。2人を仮に「Xさん」，「Yさん」と呼んでおこう。

X：昨日はあれからどうしたんだ。
Y：いつもの通りですよ。
X：ということは，午前様だったんだろう。
Y：違いますよ，いつも通りまっすぐ帰ったんですよ。

コミュニケーションが成立するためには，コミュニケーションの参加者の間で，視点が一致しなければならない（Schober, 1998）。いろいろな側面があるが，基本

となるものとして考えられたことの一つは，メッセージの背景として知っていること，信じていること，仮定していることが，コミュニケーションの参加者の間で相互に共有される，という点である。Clarkら（Clark, 1996 ; Clark & Carlson, 1981 ; Clark & Marshall, 1981）は，これらを共通の基盤（common ground）と呼んでいる。上の例でいえば，「あれ」が何を指すかについてはXさんとYさんの間で一致していたが，「いつもの通り」の「いつも」がどのような状態であるかについては食い違いがあったことになる。

この場合，自分と相手の知識（あるいは信念，仮定）が単に一致する，というのでは不十分である。知識が一致すること自体を，お互いが知っていなければならないからである。しかし，このことを厳密に捉えようとすると問題が生ずる（Clark & Carlson, 1981）。相手が何を知っているかということを自分が知っている，自分が何を知っているかということを相手が知っている，というだけでなく，こうしたことをそれぞれが知っている，さらにそのことをそれぞれが知っている……という無限の連鎖を仮定しなければならなくなる。つまり形式的に書くと，次のようになる（Schiffer, 1972）。

AとBがpということを相互に知っている。＝

1．Aがpということを知っている。

1′．Bがpということを知っている。

2．Aが「Bがpということを知っている」ことを知っている。

2′．Bが「Aがpということを知っている」ことを知っている。

3．Aが「Bが『Aがpということを知っている』ことを知っている」ことを知っている。

3′．Bが「Aが『Bがpということを知っている』ことを知っている」ことを知っている。

この系列が無限に続く。実際にコミュニケーションに携わる者が，こんな知識を有することは不可能である。それでは現実にはどうするのか。Clarkらの考え方は次のようである。

話し手と聞き手と対象pが共に存在（co-presence，共存在）しているなら，そのことが証拠になるという。聞き手が合理的で，話し手とともに対象pを注視しているなら，pを相互に知っているという推測がなされるというのである。ClarkとMarshallはこうした推測の方法（heuristics）として，次の4つを挙げている。

物理的共存在

2人が一緒にいる場面から，聞き手が話し手と知識を共有していると推測する。

AさんとBさんがテーブルを挟んで坐っており，その上にビールの入った瓶があれば，AさんはBさんもそのビールに気づいている，と推測する。Aさんの，

　このビールおいしいよ。

という発話がテーブルの上のビールについてである，とBさんも判断するだろう，というわけである。

なお，物理的共存在には，上のように両方が直接注目している対象ではないものも含まれる。たとえば2人がビールを飲み終わってビール瓶もしまった後で，Aさんが，

　あのビールおいしかったね。

と発話する場合や，また，Bさんが背後にあるビールに注意を向けることを期待して，Aさんが，

　そのビール取ってきて。

と発話することもあるからである。

言語的共存在

会話の中で言及された内容は話し手，聞き手と言語的に共存在となる。

AさんとBさんの次のような会話。

A：昨日夏山レミのCD買ったよ。
B：それ一度聞かせてくださいよ。

において，Aさんの「それ」は当然，「Aさんが買った夏山レミのCD」を指す。

共同社会の成員性

ある共同社会のメンバーであれば，当然知っていると仮定されることがら。共同社会は国全体，ある地方，町内，家族というように，非常に広いものから狭いものまである。具体的には「2005年10月における日本の首相は小泉氏である」，「ナナちゃん人形は名古屋駅の側にある」，「町内の菓子屋リリーのケーキは高い」，「S家ではゴミ捨ては夫の役割である」というように挙げられよう。2005年10月の，

　首相は今日，靖国神社を参拝しました。

というニュースからは，小泉氏が参拝した，ということが聞き手に伝わる。なお「岡林信康は反戦歌を歌った」，「部分強化は消去されにくい」のように一部の世代，また，ある専門職種においてのみ共通の知識になっていると仮定されるものもある。

スキーマ（schema：Fiske & Taylor, 1991），スクリプト（script：Schank & Abelson, 1977）もここに含まれると考えられる。

間接的共存在

物理的共存在や言語的共存在による相互知識が，共同社会の成員性に基づく相互知識とミックスされたもの。

たとえばAさんとBさんがパソコンを前にしているときに，Bさんが，

　ハードディスクはどれぐらいの大きさ？

と発話したとする。パソコンにはハードディスクが備えられていることは，パソコンを使っている人々（共同社会の成員）にとっては常識と仮定される。したがってBさんが「ハードディスク」と言うことで，これが目の前のパソコンのハードディスクであるという相互知識を確保できる。また，AさんとBさんとの，

　昨日パソコンを買ったよ。
　ハードディスクはどれぐらいの大きさ？

というやりとりでは，Aさんが「パソコン」に言及することで，Aさん，Bさんとパソコンが言語的共存在となる。そしてハードディスクがそのパソコンのものであることは，共同社会の成員の常識に拠っている。

共通の基盤に基づくコミュニケーションを行うことで，効率性が得られる。p. 1の会話例では，Xさんとしては，いちいち「あれから」がいつからなのかを説明するのは面倒だろう。また，それを口にしないことで，身内の話を周りに知られずに済む，という効用もある。

ただ，ここで注意しなければならない点がある。発話に先だって話し手と聞き手の間には予め共通の基盤が確定しており，話し手がそれに合うようにメッセージを作成すれば聞き手が機械的に話し手の意図を導出できる，と考えるのは妥当でない。話し手だけでなく，聞き手も能動的な働きをする。話し手とのやりとりの中で，聞き手はさまざまな推測を創出していくのである。共通の基盤とされるもの自体も固定的ではない。これらの点はとくに，Sperber と Wilson（1986）の関連性理論（本章IV）や，会話の実験的研究（第2章II）の議論において重要になってくる。

II．会話の協調の原則

発話からはさまざまなことが伝わる。その中には，明示されず含意された内容で，聞き手によって推論されるものもある。その1つは，構文や文の意味から必ず成立する内容である（Harris & Monaco, 1978）。たとえば，

　金さんは銀さんより背が高いし，銀さんは銅さんより背が高いよ。

という発話から，

　金さんは銅さんより背が高い。

という内容が必ず含意される（論理的含意）（西山，1999）。

光秀は信長を殺した。

から，

信長は死んだ。

が含意されるのも必然的である（意味論的含意）（西山，1999）。

しかし含意の中には異なったタイプのものもある。たとえば，

私は今，２万円持っています。

という発話からは，通常，

私は今，２万円より多くは持っていない。

という含意が生ずる。しかしこれは必然的なものではない。

私は今，２万円持っています。それに，もう１万円持っているから，全部で３万円持っています，

とも言える。また，店で品物を予約したときの，

店員：手付け金として２万円必要ですが，お持ち合わせでしょうか。
客：ええ，今，２万円持っています。

という例では，客の発話から「２万円より多くは持っていない」という含意は生じないだろう。ここで含意が生ずるか否かには，話し手，聞き手の知識や状況，すなわちClark（1996）流に言えば両者の共通の基盤が影響する。この種の含意のことを語用論的含意（pragmatic implication）という（Harris & Monaco, 1978）。

協調の原則

語用論的含意の導出について，何らかの体系的な説明は可能なのだろうか。この点に取り組んだのがGrice（1975）である。Griceはコミュニケーションの中でこうした含意が生じるのは，参加者が互いに会話の協調の原則（cooperative principle）を順守すると期待するからだと考えた。協調の原則とは，

会話のそれぞれの段階で，あなたが携わっている話のやりとりの目的，方向として，その場のひとたちが受け入れているものに従うように，会話に貢献せよ。

という内容である。

Griceはこの原則の下に，次の４つの会話の格率（maxim of conversation）を仮定した。

１．量の格率（maxim of quantity）：a．現在やりとりしている目的を果たすために要求されるだけの情報を与えるように，会話に貢献せよ。b．要求される以上に情報を与えるような貢献のしかたはするな。

２．質の格率（maxim of quality）：a．偽りであると信じていることを言うな。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com